

**令和 7 年度 第 1 回こまきこども未来館講座運営会議
会議要旨**

日 時	令和 7 年 7 月 1 日（火）午後 6 時～7 時 45 分
場 所	こまきこども未来館 クラブ室（ラピオ 3 階）
出 席 者	【委員】7 名（※敬称略） 玉置崇、長江美津子、植松浩二郎、岡田真美子、前田愛 采女隆一、宇野章子 【事務局】8 名 こども未来部長、こども未来部次長、多世代交流プラザ所長、事業推進係員、 NPO 法人 10 人村（4 名） 【傍聴者】0 名
会議資料	次第 資料 1（体験ひろば 2024） 資料 2（講座運営評価シート） 資料 3（2025 年度実施計画概要） 参考資料（3 カ年ロードマップ/2025 年度実施計画）
会議内容	1. こども未来部長あいさつ 2. 議題 (1) 令和 6 年度講座運営の評価について (2) 令和 7 年度こまきこども未来館講座等開催事業について
会議要旨	1. <u>こども未来部長あいさつ</u> ・令和 5 年度に引き続いて年間来場者数目標の 30 万人に加え、昨年 12 月には累計来場者数 100 万人も達成した。 ・地域の企業や団体・個人の方に積極的に声かけを続けており、サポーター登録人数が 200 人、パートナーシップ企業・団体が 120 社を超えた。多くの方々に協力をいただきながら運営を続けている。 ・今後も、未来リテラシーを育む、様々な講座や体験活動を実施する「体験ひろば」として企業やサポーターの協力のもと、講座や体験活動の充実を図りたい。昨年度の実績報告と、それに対する評価を行うが、より充実した講座等の実施につなげていけるよう委員の皆様にはそれぞれの見地から忌憚のないご意見をいただきたい。 2. <u>議事</u> (1) <u>令和 6 年度講座運営の評価について</u> ※事務局から資料 1 により令和 6 年度講座運営の説明、資料 2 により評価シートの説明
玉置委員	活動報告だけでは、委員の方で一から評価するのは大変難しいため、評価シートには事務局の評価（案）を記載してある。各評価項目について、評価理由を確認し、加筆・修正することで最終的に当会議の評価としたい。

	○児童が主体的かつ創造的に活動できる環境づくり 【受注者（10人村）】A 【事務局】A
植松委員	Sでも良いように感じるが、市として今以上にどのような成果を求めているのか。
事務局	中高生の意見聴取のプロジェクトなど、活動が一部の中高生に限られている部分がある。より多くの中高生に広げていければSになると考えている。
	○学びを振り返り成長を実感できる環境づくり 【受注者（10人村）】B 【事務局】B
植松委員	自己評価の仕方が職員の資質が良くないと捉えられる。そうは感じないが、どのような意図があるのか。
事務局	こどもたちへの対応について、密な関わりが必要になってくる。こどもたちもそれを期待して来館している一方で、職員は企画や準備など他の業務もあり、やりきれていないと感じる部分がある。時間的負荷や労力に関係なくこどもたちと密な関わりや成長の確認をできる場のようなものを考えていければということを考慮してこの評価とした。
植松委員	日常的な来館における振り返りは時間をかけるわけではなく、すれ違う時に「今日どうだった？」と観点を与えて声をかけるだけでも良いのでは。
玉置委員	振り返りは、誰かにさせられている内は本当の振り返りではない。文部科学省が『自己調整学習』と明示しているように、「今日楽しかった」「こういうことをやってみたら面白かった」と自分で振り返っていくことが大切。例えば出口に「今日の自分を振り返ろう」と掲示し、楽しかった、とても学んだ、などと自分でシールを貼るようにしても面白い。周りが評価するのではなく、自分がどう感じたかが次に繋がる。評価はAでも良いのでは。 【事務局】B ⇒ 【講座運営会議評価】A とする。
	○様々な遊びや体験を通して楽しみながらそれぞれの学びを見つけ、未来リテラシーを育む取り組み 【受注者（10人村）】A 【事務局】A
采女委員	評価の内容に居場所に関する取り組みが記載されている。「ただ居てもいい場所」としての安心感の提供については、評価すべき内容であると理解するが、『講座』という評価項目の中で評価することが、ふさわしいのか疑問である。運営の区分に「児童への関わり」という評価項目があり、評価のポイントとして、一人で来館する児童などへの適切な関わりが示されている。

	その評価項目において、評価することが適当と考える。 【委員異議なし】 ⇒「児童への関わり」において評価することとする。 ○地域との積極的な連携および地域住民が関わりやすい環境づくり 【受注者（10人村）】S 【事務局】S
植松委員	定量的な視点での評価となっている。今後、限りなく増え続けるものではなく、評価のポイントとして定量的な観点がはいっていないことは共通認識として持っておきたい。
	○利用促進につながる効果的な広報活動 【受注者（10人村）】A 【事務局】B
岡田委員	交通手段の面においても離れた地域に住む子どもたちが来やすくなるような環境があるといい。
事務局	既に、未来館へ来る児童は未来館のフリーパスの提示によって無料でこまくるに乗車できる。このような周知がまだできていない点もありBとした。
玉置委員	そういった面はあるものの、厳しすぎるのでは。Aでもよいのではと感じる。
采女委員	講座等の情報がより多くの人に届くよう取り組んだ点など評価するところがある。ここを以て改善されたという点があると捉えるとAとすることに賛成する。 【事務局】B ⇒ 【講座運営会議評価】A とする。 ○児童への関わり 【受注者（10人村）】A 【事務局】A
植松委員	「ただ居てもいい場所」とは、どんな意味か。
事務局	未来館は、いろいろなことが体験できる、遊べる環境である一方で、なにもしなくても良い場所が少なく、なにかをしていないとここにいてはいけないのでは、と感じてしまいがち。そうではなく、第三の居場所として、ただ居るだけでもいいところととらえていただきたい。
植松委員	「ただ居てもいい場所」という文字だけでは、説明のあった意味まで理解

	できない。「自分の居場所」として表現を変えてはどうか。 【委員異議なし】 「ただ居てもいい場所」⇒「自分の居場所」に変更する。
植松委員	「自分の居場所」としている子に対する振り返りは気を付けてあげてほしい。
前田委員	継続の講座に毎回行かないといけないとプレッシャーに感じてしまうこともあり、単発の講座に参加している。「自分の居場所」など、こどもたちがそれぞれのスタイルに合わせて利用できる環境が良いと感じる。幅広い年齢の方が利用する中で、安心して過ごせる環境をつくるためにこういった工夫をされているのか。
事務局	曜日や時間帯、来館者に合わせて工夫をしながら配置を変えている。 【議事（1）⇒ 承認】 <u>（2）令和7年度こまきこども未来館講座等開催事業について</u> ※事務局より資料3の説明 未来館ならではのコンテンツを未来館に留めておくのではなく、地域の児童館と連携し、出張型のワークショップを開催する予定。中高生の利用が増えてきたなかで、乳幼児や小学生とは違う中高生ならではの悩みを持っていることが浮き彫りになってきた。試験的にユースクリニックの実施を計画中。4月に公式LINEのアカウントを開設。Instagramやホームページ、チラシを上手く使って情報を発信していきたい。 《質疑応答》
長江委員	乳幼児はなかなか自分が思っていることをうまく言えないため、大人が汲み取ることが大切。ハイハイをする時期は愛着形成の最中で、身近な人、良く顔がわかっている人に対して親しみを覚えたり、安心感を培っていったりする。親としてはとても楽しいイベントかもしれないが、いきなり広いところに出されてハイハイしましょうと言われても、戸惑ってしまう子もたくさんいるように感じる。
事務局	声にならない声をどう聴くか悩んでいる。また相談にのっていただきたい。
宇野委員	広報の仕方について、現在講座の情報は発信されているが、できないことが発信されるとより良い。例えば、講座開催のために工作エリアが変わると

玉置委員	きに、毎日工作をしている子が知らずに来館して「今日は工作ができないのか」とならないようにしていただきたい。 組織運営では、内部の理解を得ることも大切。職員の合意形成の上、事業を進めていただきたい。 【議事（2）⇒ 承認】
-------------	---